

AIと表現の未来

梶 裕貴^{声優}

「声」という限られた表現の
無限の可能性を信じて。
AI技術と共存の道を歩む

コロナ禍を経て、「声優である自分だからこそできる表現とは何だろう?」と考えたこと——そして、自分の年齢とキャリアを思い「何かを残したい」と強く感じたことが、音声AIプロジェクト『そよぎフラクタル』を立ち上げたきっかけです。声優にとって最大の武器である“声”を生かして、私の声を使用した歌声合成ソフトや、キャラクターといつでも会話できるアプリなどをリリースしました。同時に、「正しいAIとの付き合い方とは何か?」という問いに対し、現役声優として、一つの意思表示をする必要があるとも感じていました。

目覚ましい進化を遂げる一方、さまざまな分野で議論を巻き起こしているAI技術。その発展と普及により、現在、無法地帯となってしまうのが“声の権利”問題です。ネット上は、無断・違法なディープフェイク技術を使った音声であふれかえっています。なぜ、そういった行為がなくなるのか? その大きな理由の一つに、罪の意識なくアップロードしてしまう人、そして、それを楽しんでしまう人たちのモラル・倫理観の欠如が挙げられると思うのです。つまりは、AIという技術自体に善悪はなく、あくまで、それを使用する人間側の意識にかかっているのだろうと。だからこそ私は、AIと敵対するのではなく、共存すべきだと考えています。ガイドラインに守られた、本人公認の高品質ソフトさえあれば、作り手はより自由に、その声を創作活動に生かすことができます。受け手がそれを楽しみ、さらに、そこで起きたミームが私の元に還ってくることで、また新たな創作が生まれるだろうと。

声優業をしているなかで——とりわけ朗読劇などに出演した際に、声や音、その限られた表現だからこそその可能性を強く感じます。視覚を必要としない世界だからこそその自由。たった一言で安心させることもできれば、逆に不安を与えてしまうこともある。“言霊”という言葉があるように、声にも、それだけ大きな力が宿っていると思うのです。そんな声の力を自在に操る能力をもつ人のことを“声優”と呼ぶのでしょう。だからこそ、私はその無限の可能性を『そよぎフラクタル』を通して、もっと突き詰めていきたいですし、文化や言葉の壁を越えて、世界中の人たちに伝えていけたらと考えているのです。

加えて、いわゆるアナログな表現にも全力で取り組んでいくべきだと考えています。新しいエンタメが急増しているこの時代だからこそ、朗読劇などのシンプルかつ、ストレートなコンテンツから学ぶことを蔑ろにしてはいけません。その両輪が揃ってこそ、誰もが魅力的に感じるエンターテインメントは生まれると、私は信じています。

Profile

かじ・ゆうき●1985年、東京都生まれ。2004年に声優デビュー。アニメ、ゲーム、ナレーション、洋画吹き替え、舞台などで活躍。代表作にアニメ『進撃の巨人』のエレン・イェーガー役、『七つの大罪』のメリオダス役、『僕のヒーローアカデミア』の轟焦凍役などがある。

『そよぎフラクタル』キャラクター・梵そよぎ

